

IBL (Inquiry Based Learning) 演習法を活用した 急性期成人看護学演習方法について

赤澤 千春, 林 優子

医療は日進月歩で発展しており、看護もそれに併せて多大な知識、技術が要求されてきているが、授業で習った知識・技術のみで卒業後臨床に対応できるかというかなり無理が生じている。そこで自分で問題を正しく把握し、判断していく能力が求められる。そのためには主体的に問題に取り組み、解決していく能力を養わない限り、膨大な看護・医学に関する知識を丸暗記しようとするしかないのである。したがって、看護学生の時から批判的思考、分析的な問題解決、臨床的な推論、そして主体的な意志決定の技能が要求される。その結果、最近ではアクティブ・ラーニングとしてのPBLやIBLと呼ばれる演習方法が効果的とされ、少人数の学生を個別に指導するチュートリアルシステムが導入されてきている。PBLはProblem Based Learningの略で問題解決型学習法である。IBLはInquiry Based Learningの略で問題探究型学習法である。PBLは医学系の大学でよく利用されており、与えられた情報から問題を明確にして行くことに重点をあてている。IBLは情報を与えるのは同じであるが、仮説を立て、それを立証するための方策を学習することを目的としている。成人看護学演習（急性期）は演習初回にIBLを行うことにより、思考のプロセスを身につけさせ、その後事例の看護計画立案を目標としている。2回生の成人看護学演習で立案された看護計画は3回生の成人看護学実習の際に活用している。

保健学科看護学専攻成人看護学演習（急性期）は2回生の後期に90時間行われる。慢性期と同時に演習をするため45時間ずつ、2クール実施している。演習全体の目標は事例の看護計画立案にある。事例はそれぞれのグループで異なっており、演習最後に成果発表をする。IBLは演習の最初に事例を3つのパートに分けて実施している。以下に実際の方法を述べる。このIBL演習方法は1990年代にハワイ大学で始められ、その後三重県立看護大学で行われていた。

事例の情報を2～3行の情報にし、パートが進むに従い、情報が具体的になるようにする。学生は司会、



写真1 模造紙



写真2 IBL演習風景

記録係、タイムキーパーを決め、模造紙に向かって半円形に座り、進めていく。与えられた情報から、「事実」「仮説」「必要な事項」「調べる項目」について模造紙に書き出す。この時、それぞれに時間制限があり、「事実」5分、「仮説」「必要な事項」「調べる項目」それぞれ10分とする。この時間は必ず守るように事前に学生伝える。「事実」は与えられた情報から抜き出すのが重要である。学生は情報を読んだ時にすでに解釈や推測を行っている。「事実」を挙げるときに解釈や推測の入ったものを書き出すことがある。その時は「事実」をそのまま抜き出すということの意味を確認する。「仮説」は事実から考えられる仮説を出す。「必要な項目」はその仮説を検証するために必要な項目を挙げる。「調べる項目」は仮説を検証するために知ら

ない項目、わからない項目を出す。学生はパート1～3まで、同じことを繰り返す。「調べる項目」をそれぞれ分担して翌週にグループ内で発表し合う。これまでも IBL の一連の方法である。最後の学生が調べてきたことをお互いに教えあうことが重要である。教えることで知識の獲得を確かなものにするのと、既習した知識を使い、その後の看護計画立案の演習に活用するからである。

成人看護学演習（急性期）の目標は事例の看護計画

立案である。情報からアセスメントを行い、看護問題を抽出し、それに対して具体的な計画を立てるまでの一連が課題である。目標が設定されていることからこの演習全体は PBL となる。この演習が批判的思考や問題解決能力などを高めることを目的として行っているが、結果としての評価についてはまだ十分ではなく、そのため今回は、教育活動報告のみとした。今後、この演習方法の評価を検討し、その効果を報告したいと考える。